

## 12 切迫流産妊婦の入院に伴う環境の変化や治療に伴う行動制限の影響についてのケーススタディ

○安達 綾香（赤穂市民病院）

### I. はじめに

筆者はこれまでの体験から切迫流・早産で入院中の妊婦が、入院に伴う生活環境の変化や、安静・持続点滴等による行動制限に対してストレスを持っていると感じていた。特に切迫流産では妊娠継続ができないと胎児の生命は絶たれてしまうためストレスは大きいのではないかと考えた。よって本研究では切迫流産で入院中の妊婦が入院による環境の変化や治療に伴う行動制限をどのように感じているかを明らかにする。

### II. 研究方法

1. 対象者：妊娠初期（～妊娠 16 週迄）の切迫流産で入院中の妊婦 1 名。
2. データ収集・分析方法：切迫症状が安定し、床上安静以上の安静度になった時期に半構成的インタビューを行い、質的記述的方法で分析した。
3. 倫理的配慮：対象者には口頭および文書を用いて、研究目的、方法、個人情報の守秘や研究参加の自由意思などを説明し、同意書への署名を依頼し承諾を得た。

### III. 結果

対象者は 20 代既婚、初産で出血を主訴に妊娠 7 週で入院。入院時より持続点滴が開始。トイレ・洗面以外は床上安静の指示があった。妊娠 12 週時に持続点滴を終了、妊娠 13 週で退院した。入院による環境の変化や治療に伴う行動制限への思いを【 】のカタゴリーに示す。

1. 環境の変化に対しての思い：予期していない入院という環境の変化に対して【突然の入院への戸惑い】、【役割が遂行できないことへの葛藤】、家族とともに過ごせない【不安】、【時間の使い方への困惑】があった。一方で、入院生活を【休養のための時間】として捉える一面もあった。
2. 妊娠継続への不安：切迫流産という診断がついたこと、胎児の存在がエコーなどを行わないと確認できない時期であることから【妊娠継続への不安】を感じていた。
3. 安静への思い：セルフケア能力があるが、できないことから【行動制限への戸惑い】がみられた。しかし、妊娠を継続するために【行動制限の必要性の理解】も見られた。また、安静度を【切迫状態を知るための指標】としていた。
4. 持続点滴への思い：持続点滴が必要であることを【切迫状態を知るための指標】にしていた。また、行動が制限されることを【安静を守るために必要なもの】とも捉えていた。留置針の入れ替えを【痛みを伴う苦痛】と感じていた。輸液ポンプのアラーム音のため、【睡眠を妨げられる苦痛】を感じていた。
5. 胎児への思い：入院中、週に 2 回程度のペースで診察が行われていた。エコーで胎児の存在を確認し【胎児への愛着】を感じ、胎児に会える回数が多いことを【他の妊婦より得をしている】と感じていた。

### IV. 結論

切迫流産で入院中の妊婦は、入院や行動制限に対して、ストレスを感じながらも同時に、現在の状況を受け入れようとしている気持ちと、これらを前向きにとらえようとしている姿が明らかになった。また、感じ方の変化には時間の経過と状態の軽快も影響している可能性が大きい。